

2026年度 第1年次入学 試験問題

(C 日程)

小論文

(注 意)

- 1) 問題冊子1部、問題用紙1枚、それに解答用紙が3枚ついています。問題冊子は4ページあります。合図があったら開いて確認してください。
- 2) 氏名、受験番号を解答用紙の所定の欄にはっきり記入してください。
- 3) 試験時間は60分です。
- 4) 終わりの合図があったら、問題用紙及び解答用紙を机上に置き、監督者の指示に従ってください。

発達障害とは「脳の個性」である

発達障害とは何か――。

この2年ほど、発達障害に関わる方々に取材を重ねてきました。本書には、そのなかから13篇のインタビューを収録すると同時に、取材を通じて私なりに考えた「発達障害を理解するために大事なこと」をまとめていきたいと思います。

医師や研究者、教育者などの専門家、そして発達障害と診断を受けた当事者やその家族など、さまざまな立場の方々に、多くの質問や疑問を投げかけてきました。

そのなかで「答えるのが一番難しい」といわれたのが、冒頭の質問。「発達障害の定義」だったので。

なぜ専門家が悩むほど、当事者がうまく答えられないほど、発達障害を定義することは難しいのでしょうか？ その理由がどこにあるのか、この章を通して見ていきましょう。

ポイントは「本人が困難や障害を感じるかどうか」

ひとつは、発達障害であるかどうかの判断においては「日常生活での困りごとがあるか」という部分が重視されるからです。

例えば、「忘れ物が多い。じっと座っているのが苦手」など、同じ特性があるAさんとBさん。Aさんはハーブを栽培する仕事をし、Bさんは役所で働いています。Aさんは日常生活において大きな困りごとはありません。一方のBさんは、しなければならぬ連絡を忘れていたり、計算ミスを頻発したりするなど、失敗ばかりで毎日上司に怒られています。

同じ特性があるAさんとBさんですが、「発達障害」と診断される可能性があるのはBさんです。Aさんは日常生活において大きな困りごとはありませんから、診断はつかないでしょう。そもそも病院へ行って診断を受ける必要がないのです。

このように発達障害の定義においては、日々の生活のなかで「本人が困難や障害を感じるかどうか」がポイントとなります。これは、いわゆる「病気」の定義とは大きく違います。

例えば糖尿病。自覚症状が出にくいといわれる生活習慣病です。自覚症状がなければ、「生活に困難を感じる」こともなさそうですが、血糖値などの客観的な基準を満たせば、糖尿病と診断されるわけです。つまり、このような病気は発達障害と違い、客観的な診断基準が重視され、本人が困難を感じるかどうかは「病気かどうか」を判断するための指標にはならないということです。「生活に困難はない！ だから糖尿病ではない」と本人がいくら主張したとしても、検査データなどから医師が糖尿病であると判断すれば、糖尿病と診断されます。

発達障害にも「診断基準」はあります。「DSM」などのマニュアルにはチェック項目が列挙されています。しかし、慶應義塾大学名誉教授で小児科医の高橋孝雄氏は、「チェックリストのうちの何項目が当てはまるかより、お子さんや家族が日常生活で本当に困っているかどうかをしっかりと見極める」としています。

発達障害であるかどうかは数値やデータといった物差しだけで測れるものではなく、本人の主観に大きく左右されます。これが発達障害を定義するのが難しい理由のひとつです。

治すべきものではない

発達障害を「脳の個性」や「脳の多様性（ニューロダイバーシティー）」とする動きも出てきています。日本で初めてADHD（注意欠如多動症（*1））専門外来を立ち上げた医師の岩波明氏は、「発達障害は『病気』ではなく、したがって『治すべきものではない』といいます。

”発達障害は生まれつきのもです。ポジティブに表現すれば、「脳の個性」ということもできますが、個性ですから「治る」ことはありませんし、基本的な特性は変わることはないのです。”

発達障害の当事者である横道誠氏も「いまでは、発達障害者だけでなく定型発達者も『脳の多様性』を生きているという考え方が支持を集めている」としています（*2）。

「定型発達者」というのは、発達障害ではない大多数の人々を指す言葉です。「『脳の多様性』を生きる」というのは、人は皆違った脳を持ち、その特性とともに生きているということです。ただし、そのなかには多数派と少数派がいて、前者は普通、後者は障害とされ、「定型発達者」と「発達障害」という区分がなされてきたという指摘です。このように捉えると、発達障害の見方が大きく変わる気がします。

つまり、「発達障害は病気ではなく、脳の個性であり、特性である」。

発達障害を理解するにあたり、最初に頭に入れておきたい考え方は、

発達障害に必要なのは治療ではなく対応

自分の子どもが学習障害だとわかり、一番つらかったのは、「治らない」という事実でした。息子は文字の読み書きが極端に苦手な発達性読み書き障害です。最初のころは、発達障害の知識がなかったために、「専門的な訓練を受けたら治るかも」「目のトレーニングをすれば、普通の子のように読めるようになるのでは」といったことを延々と考えたものでした。

発達障害は治りません。

ここが、うつ病などの精神疾患とは違う部分です。発達障害の特性は生まれつきですから、「なったり、治ったり」ということはありません。現在、発達障害の診断を受けている人は、生まれたときからそのような特性の脳を持っていたわけです。

これを岩波氏は次のように説明します。「仮に、うつ病を例にとれば、『生まれつきうつ病』という人はいません。しかし、発達障害は生まれつきのものです」。うつ病のような病気や疾患は、人生のある時期に罹患することはあっても、生まれつきということはありません。そして、治療も可能です。ここは明確に違う部分です。

治らないなら、環境を変えてみる

脳の特性だから治らない。では、何もできないかということそんなことはありません。脳の特性を「治療」することはできませんが、そこから生じる困りごとに「対応」はできます。

例えば、環境を変えることはできます。

就職で困っているのであれば、障害者雇用で就職するという選択肢があります。

職種を選ぶことも大切です。

1人でできる仕事は、発達障害の人に向いています。ADHDの借金玉氏は、銀行を辞めて作家となり、起業しています。看護師だった沖田×華氏は、漫画家として活躍しています。チームで働くのではなく、個人で働く方向へのシフトです。

ライターという仕事をしていると、何かと大学の先生に会う機会が多いものです。そんなときに発達障害が話題になると、「うちの学校の先生にも多いよ」「実は、私もそうなんだ」などとおっしゃる先生が多く、驚かされます。発達障害の特性は、どうやら研究職にも向いているようです。一般企業では、管理職への昇進やリーダーへの就任を断ることで、精神的な負担を減らしている方もいます。

リモートワークができるようになり、働きやすくなったという話も聞きます。発達障害の特性がある人にとって、「1人で働ける環境」は仕事をするうえで大切になるようです。

道具を変える、方法を変える

学習障害であれば、道具を変えることで、ずいぶんと負担が減ります。発達性読み書き障害の息子は、小学3年生からタイピングの練習を始め、4年生で教室にタブレットを持ち込みました。これで初めて、皆と同じように授業時間内で板書を写せるようになりました。考え方を大きく変えて、対処の方法を変えるのも有効です。

ADHDで持ちものをすぐなくしてしまう子の親御さんには、「消しゴムはなくなるもの」と割り切って、消しゴムをたくさん買い置きしている方がいます。筆箱を複数持っている子もいます。なくすたびに探したり、叱ったりするより、ストレスがありません。発達障害であることを、変えることはできません。その事実を受け入れると逆に、できることが見えてきます。

*1 ADHD（注意欠如多動症）…注意・集中力の欠如と多動・衝動性が見られる障害。

Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder の略称。

*2 横道誠『みんな水の中』（医学書院、2021）

黒坂真由子 『発達障害大全―「脳の個性」について知りたいことすべて』（2023. 株式会社日経BP Kindle Edition.）

途中、文章の中略を含む

問題

別紙文章を読んで、以下の条件を満たす文章を 800 字から 1,200 字以内で書きなさい。

1. この著者の定義する「発達障害の定義」とはどのようなものか述べること
2. この著者の定義する「発達障害の定義」と、これを読むまでのあなた自身の「発達障害の定義」の相違点を述べること（何が同じで何が違っていたか）
3. 本学の建学の精神では「他者のために自分の能力を用いることのできる人間を育てる」ことに重きをおいています。この文章を読んで、本学の建学の精神と、発達障害を持つ人たちへの見方、考え方と、どのような関係があり得るか、あなたの考えを述べること